

ヨハネによる福音書1章1－18節 「神の言語」

1A 神なる「ことば」 1－5

1B 永遠 1－2

2B 創造 3

3B 命 4－5

2A 光なる「ことば」 6－13

1B 光の証し 6－8

2B 光の到来 9－13

1C 受け入れない人々 9－11

2C 受け入れ、信じる人々 12－13

3A 独り子なる「ことば」 14－18

1B 御父の栄光 14－15

2B 恵みとまこと 16－17

3B 神の説き明かし 18

本文

ヨハネによる福音書1章です、私たちはついに、聖書通読の学びで第四の福音書に入ります。マタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネです。ヨハネによる福音書を皆さんとつしよに見ていくことを、とても楽しみにしていました。私たちの主、イエス様をじっくりと調べ、見ていくことはいつも、わくわくすることですね。しかも、イエス・キリストの生涯は同じ生涯であるにも関わらず、新約聖書は四巻も、その証言を残しているのです。それだけ、この方こそが私たちの信仰の対象であり、この方を知ることが、私たちの命でもあることが分かります。

これまでもずっと説明してきましたが、それぞれの著者が語っているイエス様は、新約聖書の書かれた時代を反映しています。当時のローマの世界に生きている、ユダヤ人たちがいました。その中で、ユダヤ人たちは自分たちの約束のメシア、救世主を待ち望んでいました。しかし、この方はユダヤ人の王のみならず、世界の諸国の光でもあります。

このことを、それぞれの著者がある側面を他の側面よりも強調して、イエスを証言しています。マタイは、神のご計画の中で只中にいるユダヤ人のことを考えて、書き記しました。いかにイエスが、約束されていたダビデの子であり、神の国の王であられるかを描いています。またモーセのような預言者であり、教師であり、山上の垂訓は、神の国の教えの骨頂であります。マルコは、ローマの中に生きていることを強調していました。ローマは、力が物を言う世界です。ローマの政治、ローマの軍事力、また富があります。教えよりも、実際に事を動かすことができるのかどうか、大事にされていました。そこに描かれているイエス様は、神の仕える僕であられ、奇跡の御業が強調されています。キリスト

が行われたことが、「すぐに」という接続詞でつながれて、次々と出てきました。悪霊レギオンとの対決は、他の福音書より、詳細に描かれています。そして、私たちがこれまで学んできた福音書の著者ルカは、ユダヤ教に改宗したか、非常に興味のあるギリシア人です。当時のローマ帝国は、政治的に、軍事的に世界を支配しましたが、すでに文化的にはその前のギリシア帝国が支配していました。ヘレニズム文化と言いますが、ギリシア人の言語であるギリシア語が、ローマ帝国のどこに行っても使われていた人々の話す言葉です。新約聖書もギリシア語で書かれました。ギリシア人は、文化、芸術、思想などを愛しました。ルカは、そういった人々にイエスを紹介しました。放蕩息子は、ルカしか取り上げていないイエス様の譬えです。知的で、探求型の人々には、ルカによる福音書は適した書物でしょう。

ここまでの三つの福音書は、それぞれ共通する記述が多いです。それで、「共観福音書」とも呼ばれます。観点を共有できるということです。けれども、ヨハネによる福音書全体を読まれた方はお気づきになったでしょう、これまでの三つの福音書とは本当に様相に違いを見せています。ヨハネの書いた時期が、その違いを浮き彫りにします。ヨハネは、イエス様の十二弟子の一人で、しかも、ペテロと兄弟ヤコブと並んで、イエス様が特別な奇跡を行われる時、またゲッセマネの園で苦悩の祈りをされる時に、間近に呼び寄せた三人の弟子の一人です。ペテロよりも、若かったと思います。しかしヨハネは、他の使徒たちがみな殉教して死んでいった中で、なおのこと奇跡的に生き残り、パトモス島に流刑されるも、時の皇帝ドミティアヌスが死んだので、釈放されました。そしてエペソに戻り、黙示録を書き記しています。そして、福音書も、三つの手紙も書き記しています。彼の書いたのは、主が十字架に付けられ、甦り、昇天してから、約 60 年の月日が経っていた頃のことです。90 年代に書いたと言われていています。

ですから、もう世代が大きく変わっているということです。当時を知る人は、まずほとんど誰もいません。ユダヤ人は、紀元後 70 年の神殿崩壊によって、祖国を失いました。64 年には、ローマによる組織的な迫害が、64 年に皇帝ネロによって始まりました。ヨハネがパトモス島に流刑されたのは、ドミティアヌスという皇帝で、自らを神として拝むように強要していました。そして教会には、異端が入り込んでいました。グノーシス主義という、肉体を悪とする哲学です。ですから、自分たちが何を信じているのか？という信仰告白の明記が必要です。そういうことをやっていると、一体何が起こるか？というと、「いのち」を失います。形はしっかりと教会があり、信仰告白もはっきりと、明確になりますが、言葉の表現を超えたところの「神とのつながりによる命」が枯渇してくるところです。エペソにある教会に対して、イエス様が「初めの愛から離れてしまった」と言われた問題が起こります。

それで、ヨハネは、元々が素朴な漁師であったユダヤ人であり、持ち前の単純さで、「いのち」を語り始めます。キリストにこそいのちがあり、永遠のいのちがあることを語り始めます。この方の名に全幅の信頼を置くことこそ、まことの命があることを彼は教え始めます。福音書の書いた目的を、ヨハネははっきりと最後に記していて、こう言っています。「20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためです。」

ちを得るためである。」数多くの人々が、数多くの知識を振りまくことはできるでしょう、しかし、たくさんの知識をヨハネは持っているはずなのに、最長老で、しかもイエス様の身近にいた本人は、「ああ、これなら初めから聞いているよ」というような、単純なことを語り始めます。しかし、彼のことばを聞いていくうちに、自分の心に何かが起こっていることを知ります。むしろ知識の中で、埋もれていたことであり、それは「御子の内にあるいのち」です。

私は信仰を持って間もない時、この福音書を初めに読むと良いと勧められて読みましたが、今で言うと、立体の 3D 眼鏡をかけているような気分になりました。つまり、紙の上の字面ではなく、一つ一つの言葉がそのまま自分に対して語られている気分になったのです。理屈じゃないんですね、そのまま受けとめるに値するものです。

ヨハネによる福音書は、大きく分けると「前置き」が、今日読んでいく、1 章 1-18 節にあり、そこから、彼は敢えて、イエス様の行われた七つのしるしを書きます。イエスが確かにキリストであり、神の子であることを指し示す印です。それでも受け入れない人もいれば、受け入れる人もいて、受け入れる人々は、神がそのようにしてくださったということを強調しています。それが 12 章まで続きます。そして、すでにご自分のものとされている弟子たちに対して、主が死なれる直前に、愛のあらん限りのことを行われます。ご自身が昇天されてから、彼らが守るべき戒めを与え、親しいからこそ、友だからこそ与える約束を下さいます。それが 13 章から 17 章まで続きます。そして、主ご自身が罪の供え物となり、その後、甦られる記録です。18 章から 21 章までです。

その外の分け方もありまして、それはちょっと込み入った説明になります。1 章 14 節で、「ことばが、私たちの間に宿られた」というところが、幕屋を張られたと訳すことができ、主イエスが、まるで大祭司が外庭から聖所に入り、さらに至聖所の中に入る時の儀式に使われるものが、イエス様の教えの中に出て来て、しかも同じ順番で出てくるというものです。1 章が祭壇における罪の供え物について、2-3 章は、洗盤における水の洗いについて、そして 4 章から 17 章に、パンや燭台の光、そして香壇における祈りなど、聖所の中の奉仕について。そして 17 章から 20 章までが、垂れ幕から入り、至聖所の中での奉仕について書いてあると言われます。ともかくも、ヨハネはユダヤ人にもよく分かる書き方をしていますし、また、永遠のいのちを喩える時に、水であるとか、光であるとか、人間であればだれでも理解する言葉によって、いのちを説き明かしていきます。

1A 神なる「ことば」 1-5

それでは、前置きとなる 1 節から 18 節までを読んでいきましょう。ヨハネは、「ことば」ギリシア語ですと、ロゴスから書き始めます。このロゴスは、確かに神のご性質を持っている方なのだということを語り始めます。

1B 永遠 1-2

1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。2 この方は、初めに神と

ともにおられた。

午前礼拝でお話したように、ヨハネは明確に、この「ことば」を、創世記 1 章 1 節を思い起こさせています。「はじめに神が天と地を創造された。」そして続けて、2-3 節も読んでみます。「2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。」天地を造られた神は、言葉によって天地を造られました。聖書では興味深いことに、主の語られる言葉が、まるでその言葉自体が人格を持っているかのように語られていきます、例えばイザヤ 55 章 10-11 節です。「雨や雪は、天から降って、もとに戻らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種蒔く人に種を与え、食べる人にパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。」箴言においては、知恵の言葉が、まるで人格を持った神であるかのように語られます。「9:1-9 知恵は自分の家を建て、石の柱を七本、切り出し、いけにえを屠り、ぶどう酒を混ぜ合わせ、その食卓も整え、侍女たちにことづけて、町の最も高い所で呼びかけさせた。「浅はかな者はみな、ここに来なさい」と。また、良識のない者に言った。「さあ、わたしのパンを食べなさい。わたしが混ぜ合わせたぶどう酒を飲みなさい。浅はかさを捨てて、生きなさい。分別のある道を、まっすぐに歩みなさい」と。」

主なる神は、ご自分を啓示して、ご自分の栄光を現そうとおられて、それを、言葉をもって伝えておられると言うことです。ヘブル 1 章の冒頭にあるように、主はかつてご自分のことを預言者に言葉を授けることによって語られましたが、終わりの日には御子によって語られました。この方そのものが、神が言葉をもってご自身を示そうとされた究極の姿であられ、「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり」とヘブル書の著者は語っているのです(1:3)。ですから、地上にイエス様がおられたというのは、この方そのものが、神がご自身のことをお語りになりたいそのものであられ、主が泣かれた時は父なる神が泣かれており、主が憐れんでおられる時は、父なる神が憐れんでおられ、この方を見るならば、父なる神を見ているのと同じだということです。この方こそが、「ザ・神のことば」なのです。黙示録 19 章で、地上に再臨されるイエス様が現れていますが、その呼び名は、「神のことば」であります(13 節)。

ですからイエスは本質的に神ご自身であられ、創世記 1 章 1 節よりも前に、天地創造の前に初めから、父なる神と共におられたということです。永遠に生きておられる方だということです。これからイエス様は、ユダヤ人と論争する時に、彼らがイエス様を迫害していったのは、ご自身と神と一つにされたことに他なりません。イエス様は、彼らに「8:58 アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』のです。」と言われました。当時からも二千年前に生きていたアブラハムよりも、さらに前にご自身はおられた、いや、おられると明言しているのです。

2B 創造 3

3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つ

もなかった。

主は、すべてのものの先におられ、かつすべてのものはこの方によって造られました。まさに、創造主なる神と一体であることが、ここから分かります。ヨハネによると、イエス様が行われた最初の印は、カナにおけるものでしたが、水をぶどう酒に変えられました。ちょっと科学的知識を知っておられる方なら、「水にはない成分を造られた」ことに気づきます。水をどんなに加工しても、ぶどう酒にはならないのです。無から有を創造されました。このようにして、主はご自身が単なる教師ではなく、教師以上の方であり、単なる預言者以上の方であり、父なる神と同等の神の御子であられたということです。

ですから、そういった視点からイエス様が、弟子たちに「心配してはならない」と言われた時のことを思い出すと、興味深いです。「マタ 6:26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養ってくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。」と主は弟子たちに言われました。その時に、「この空の鳥も、わたしが父と共に造ったのだよ。」と胸の中では思っていたのかもしれませんが。そこに造り主であるかたが、人間のユダヤ教ラビとなっておられて、それで弟子たちに教えておられたのです。

3B 命 4-5

4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

神がすべて命あるものを造られたのですから、神につながっていることこそが、生きることになります。単に肉体の命が造られているだけでなく、神に結ばれているという霊のいのちがあります。永遠のいのちとは、永遠に生きておられる神のいのちということであり、私たちが今、生きている時間が永遠に続くという意味ではありません。男女の恋をうたう歌には、「永遠」がよく使われますね。永遠にこの時が続くようにみたいな。もちろん、男女の恋と神との交わりは全く異なる次元ですが、けれども、一緒にいる時が究極の意味があるということで、永遠を使っています。私は、19歳でキリスト者になりましたが、その時に「ああ、もう今、死んでも後悔がない。」と思いました。キリストにある命を知ったことで、自分の生きている目的は完成したことを知ったからです。残りの人生は、この方と共に生きるだけなのだということを知りました。ヨハネは、その神のいのちが、ことば、つまりイエスのうちにあるのだと言っているのです。「Iヨハ 5:12 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。」

そして、「このいのちは人の光」であると言われます。そして闇は光に打ち勝ちませんでした。神のいのちにつながれていることによって、見えるものが見えるようになります。この箇所もまた、ヨハネは創世記 1 章を考えながら書いているでしょう。「光、あれ。」すると光があった。」とあって、闇しかなかったところに、光がありました。使徒パウロは、ここの箇所を使って、私たちの内にもキリストの

光が与えられて、明るくなることができることを話しています。「Ⅱコリ 4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださいました。」イエス様は、生まれつきの盲人の目が見えるようにされましたが、「9:39 わたしはさばきのためにこの世にきました。目に見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」と言われました。そこにパリサイ人がいましたが、彼らは肉眼では目は見えていますが、イエスにある光を拒んだので霊的に盲目になっていると言われたのです。

ところで、午前礼拝の説教でも話しましたが、「闇はこれに打ち勝たなかった。」という言葉ですが、あまりにも多くの人々が闇によって闇を打ち消そうとします。光を灯せば、全体が明るくなり、闇は一瞬にして打ち消すことができます。必要なのはただ一つ、いのちの光であられるイエスご自身です。

2A 光なる「ことば」 6-13

そして、闇の中にある世に対して、光が来たのですが、他の福音書と同じようにヨハネは、バプテスマのヨハネの役割を話しています。

1B 光の証し 6-8

6 神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。7 この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。8 彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。

1章の後半、19節でヨハネが自分自身はキリストではないと、エルサレムから遣わされた祭司たちとレビ人たちに対して否定している場面が出てきます。そして、4章あたりまでに、バプテスマのヨハネがイエスご自身を指し示している姿が出て来て、彼自身は福音書の記述から姿を消します。それは、彼は光ではなかったからです。光について証しするために来たからです。

2B 光の到来 9-13

1C 受け入れない人々 9-11

9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

光と呼ばれるものは世には多くある中で、まことの光が世に来ようとしていたとあります。光には、例えば医療の発達によって、今までは不治の病であったと言われていたものが治療可能になったというものもあれば、人が生きていく道はこういうものだとする哲学みたいなものもあるでしょう。産業技術は人々に多大な便益をもたらし、光とも言えます。さらに宗教は、まさに光を反映しています。しかし、これらは「まことの光」ではないということです。すべての答えは、まことの光であるこの方にあるのです。そしてこれは、一部の人ではなく、「すべての人」、すなわち全人類です。人であれば、だれ

もがこの方により救われます。

ところが、世における皮肉あるいは矛盾を使徒ヨハネは記しています。二種類の人を挙げていますが、10 節はユダヤ人ではない人たち、異邦人の人たちのことです。11 節はユダヤ人のことです。10 節の異邦人の人たちの問題は、「この方を知らなかった」ということです。自分自身を造った方なのに、造られた本人は造った方を知らないということです。使徒パウロは、その姿を次のようにローマ 1 章で言い表しました。「1:20-21 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」そして、造られた物に似せた偶像を拝んでいる愚かさを論じています。

そして次に、「ご自分のところ」というのは、イエス様がユダヤ人であり、ユダヤ人は神の選びの民ですから、ユダヤ人のメシアとして来られたということです。ご自分のところに来られたのに、なんと、その民がご自身を受け入れなかったという矛盾です。

2C 受け入れ、信じる人々 12-13

しかし、これはまた別のことを物語っています。そのままでは、世はキリストをそのような方として受け入れることはできない、そもそも敵対しているのだということです。私たちは、この世がこの方に造られたのだから、この方をあがめるのは当然であると思います。そして、ユダヤ人が待ち望んでいた救い主なのだから、真っ先に彼らが受け入れるのは当然であると思います。ところが、真逆のことが起こりました。事実、全ての人がこの方を主と受け入れておらず、ユダヤ人に至っては、本当に一部しかこの方を受け入れていないということです。しかし、それは別のことを物語っていて、「神ご自身によらなければ、私たちはこの方を造り主であり、救い主であると知ることさえできないのだ。」ということです。そこで次の文があります。

12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

この方を受け入れるとは、具体的には、「その名を信じ」ということです。イエスの名を信じるということですが、これは一体どういうことでしょうか？ただ、「イエスは主です」という言葉を唱えることでしょうか？いいえ、違います。聖書では、「名」というのは、その人物の本質を示しています。この方の本質を知って、深く信頼するということです。イエスを信じるとは、全人格的なことです。知的に受け入れることではなく、知的にも、感情においても、心を尽くして信じ受け入れ、そして何よりも意志において、この方を自分の主とすると決めることです。

そのようにした人には、「神の子どもとなる特権をお与えになった」とあります。これは、とてつもない特権です。ヨハネは、この福音書でイエス様がいかに、父なる神と近い関係を持っているかを、イエス様ご自身が説明している言葉をたくさん書き残しています。神の御子として、御父といかに親しいかを書いておられます。しかし、そこで、神のかたちに造られたのに罪によって引き離されてしまっている私たちに、キリストにあつてその交わりの中に入ることを、強い情熱としておられます。ご自身が天に昇られた後に、聖霊が降って、あなたがたはそのまま父に、わたしの名によって願うことができる。そしてその願いは聞かれると約束されました。そして、「17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。」と祈られています。そしてついに、イエス様が復活されると、マグダラのマリアに、「20:17 わたしの兄弟たちのところに行つて、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」と言われたのです。イエス様が長男、長子であり、私たちがイエス様の兄弟となり、神の家族の中に招き入れられたということです。私たちは被造物であり、私たちが神の子どもという時に、イエス様の神の子と意味はまるで違いますが、それでも、養子縁組として神の家族の中に招き入れられたのです。

そして、救われるということが、一方的な神の働きかけであることが、「ただ、神によって生まれたのである」というところから分かります。神によって生まれたことを示すために、三つのことではないと否定から始まっています。一つは、「血」によらない、ということです。クリスチャンになる、イエス様を信じるということが「血縁関係」によるものではない、ということです。自分の父親、母親がクリスチャンであれば、自分もクリスチャンになることはできない、ということです。韓国語のクリスチャン用語で、「母胎からクリスチャン」という言葉がありますが、これは間違いですね。生まれながらの人は、誰もが神から離れています、罪の性質があるからです。次に、「肉の望むところ」ではありません。自分の頑張り、意欲によって神の子どもとなることはできません。金持ちの青年がイエス様から離れた時に、らくだが針の穴を通るよりも、金持ちが神の国に入るのはもっと難しいとイエス様は言われましたね。人にはできないけれども、神にはできるのです。最後に、「人の意志」によりません。これは、「他の人が、神の救いを決めることはできない。」ということです。例えば、今、私が賞状を作ったとします。そして皆さんが学びに最後まで参加して、「はい、あなたは全部出席しました。これで無事に神の子供です。」と言うことができないのです。ただ、神によって生まれるのです。これはヨハネ 3 章の、ニコデモに対するイエス様の言葉、新しく生まれるところでしっかりと見ていきます。

3A 独り子なる「ことば」 14-18

そして、イエス様が地上に神の栄光に満ちる幕屋を、ご自分が肉体を取られることによって造られたと言う箇所を読みます。

1B 御父の栄光 14-15

14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

神はヤコブの子孫をエジプトから連れ出して、ご自分の民としました。そして、彼らの住む荒野の宿営の真ん中に、幕屋を造りなさいと神はモーセに命じられました。シナイ山に主が天から降りて来られた時は、イスラエル人は死ぬんじゃないかと恐れしました。なぜなら、聖い方だからです。しかし、神は幕という仕切りを設けることによって、その中でご自身が現れるようにして、また祭司が中に入ってご臨在に近づく時は、いけにえの血を携えることによって罪の清めを行って、入ることができるようにされたのです。幕屋の入口があり、入ると青銅の祭壇があります。そこで祭司は、牛や羊を屠って、血を流し、祭壇で火に焼きます。祭司は青銅の洗盤で手足を洗って、その奥にある聖所に入ります。聖所もまた、四重もの幕があります。その中に入ると、臨在のパンの机が右にあり、左には灯をともし燭台があります。正面には香を焚く祭壇があります。そしてそこは同時に、更なる仕切りがあり、垂れ幕と呼ばれます。そこを年に一度大祭司のみが入り、血をたずさえて入りますが、そこは至聖所と呼ばれます。

ここの「私たちの間に住まわれた」は、「幕屋を張られた」と訳すことができます。つまり、昔、イスラエルの民の住む只中に、神の栄光を見ることのできる幕屋が張られたように、今は、イエス・キリストの肉体が幕屋となっていて、この方によって神の栄光を眺めることができるということです。そして、その栄光とは、これまでの預言者と違い、「父のみもとから来られたひとり子としての栄光」であると、グレードアップしています。父と子の関係にある、しかもアブラハムがこよなく愛した独り子イサクのように、独り子にしかないその特別な愛の関係にある栄光だということです。私たちのいのちがどこにあるか、お分かりですね。それは、「御父と御子にある交わり」です。ヨハネは第一の手紙でこう言いました、「1:3-4 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」

そして、その栄光を見る時の特徴は、「恵みとまことに満ちておられた」というものです。モーセが、「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」と願った時に、主は、その栄光の後ろ姿だけを見ました。主は、「わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、主の名であなたの前に宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み、あわれみもうとする者をあわれむ。」と言われました(出エ33:18-19)。主の栄光とは、あらゆる良きもので満ち、恵みに満ちたものでした。そして今、御子ご自身が肉体を取られることによって、恵みは、まことをもって、つまり究極の姿で現れるということです。

15 ヨハネはこの方について証して、こう叫んだ。「『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。」

バプテスマのヨハネは、この方を証言していたということです。彼はこの方が自分よりも優っているとして、それを強調して証言していました。その理由が、「私より先におられた」というのです。これは彼がイエス様よりも先に生まれているという事実にも反するし、彼が初めに宣教を始めたというところにも反します。つまり、ここの先というのは、存在における先のことです。主は、天地創造の前からお

られた方、父なる神のふところに永遠の昔からおられる方という意味です。だから、次元が違います、預言者である自分より、はるかに優れた方です。

2B 恵みとまこと 16-17

16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

律法の与えられたモーセの時代でさえ、先ほど説明したように恵みがありました。神は恵みに満ちたお方です。しかし、その上にさらに恵みを受けたとヨハネは言っています。これは、「王たちの中でも王」という意味の「王の王」ということ、また、「聖なる所にあるさらなる聖なる所」という意味での至聖所がありますが、恵みの上にあるさらなる恵みということです。律法によっては完成しなかったことを、主が恵みとまことによって実現していきます。福音書の中には、しきたりによって六つの水がめがあるところで、イエス様がそれを結婚式でぶどう酒に変えられるであるとか、律法の中にある人々に完成されていない、欠けている部分を満たし、さらにあふれさせるほどにする姿をこれから見ていくのです。

私たちの生活にも、「これは恵みだ」というものが、キリストに出会う前からあったことでしょう。親がいてくれる、生活は支えられていた。けれども、満たされていませんでした。キリストに出会って、初めて、すべてに意味があり、すべてが神の良きもので満ちていることを知ります。

3B 神の説き明かし 18

18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

ヨハネは、明確に、「いまだかつて神を見た者はいない」と言っています。「顔と顔を合わせて選り出した」と言われるモーセであっても、今、見たように、主ご自身の後ろ姿のみを許されるだけでした。だれも神を見たことがないのです。「I テモ 6:16 死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。」しかし、この方、「ロゴス」は、父のふところの中におられる、独り子です。そして神ご自身です。この方が人となられて、神を説き明かされました。ちょうど、今、みことばの説き明かしをして、その意味が明らかにされていくように、神ご自身がキリストによって明らかにされているということです。

私たちが、ヨハネが第一の手紙で言っているように、御父と御子の交わりの中に入っていきますように。いろいろなことがあっても、結局はここにのみ、いのちがあることを覚えますように。